

吉田幸一編

獲  
諸家字記

上

古典文庫

吉田幸一編

獲書  
諸家字名記

上

古典文庫

平成九年一月二十日印刷発行 非売品

編者 吉田 幸一

発行者 吉田 幸一

印刷者 白橋印刷所

製本者 共伸舎

記名高家諸  
上

発行所

114

東京都北区西ヶ原  
三ノ三四ノ一二 古典文庫

電話 〇三(三九一〇)二七一七  
振替口座 〇〇一九〇九・一四五九七番

護國

諸家高名記  
上



目次(上)

|           |     |
|-----------|-----|
| 凡例        | 五   |
| 諸家高名記 卷之一 | 七   |
| 諸家高名記 卷之二 | 七   |
| 諸家高名記 卷之三 | 七   |
| 諸家高名記 卷之四 | 二九  |
| 諸家高名記 卷之五 | 一六一 |
| 諸家高名記 卷之六 | 二〇五 |
| 諸家高名記 卷之七 | 二四五 |
| 諸家高名記 卷之八 | 二八三 |



## 凡 例

一、本書には、絵入『諸家高名記』正徳四年版、十五卷十五冊（甲・乙本の二本）を底本として翻刻した。

本書は『図書総目録』には未載の稀書であり、作品は武家物の浮世草子ともいうべく、作者も明記されていないが、月尋堂の作ではないかと思われる。

一、翻刻に際しては、できる限り底本に忠実にと心がけたが、大体次のようにした。

(1) 漢子・仮名表記の別、送り仮名・振仮名等はすべて原文のままを指向したが、漢字は概ね現行字体にした。略体・異体字は、その通りの活字がないものは、現行字体に直した。

(2) 作品中には同一人名であるのに「後藤又兵衛―五嶋又兵衛」「渡辺内蔵助―渡部内蔵介」「太閤」と「大閤」と両用、また同一用語でも「鉄鉋―鉄炮」「旗―旗」などと異なる文字を用いたり、宛字、例えば「規模」を「矩模」

としたりした類や、誤字・脱字などもあるが、誤字を訂し（例えば「裁頂↓頂戴」「百性↓百姓」「横綫↓横幌」「蜜談↓密談」「奥議↓奥義」中国人名などの誤りも訂し）、誤植と思われるがちなものには、右傍（ルビのある時は左に（ママ）印をつけた。

- (3) 各巻の目録と本文と標題とに違いのあるものがあるが、原文のままとした。
- (4) 底本には、読点、濁点が施されているが、すべて原文のままとした。ただし、読点がなくて、文章が長く続いていたたり、固有名詞が数個以上列なっていたりしている部分は、適宜字間をあけた。

- (5) 底本の丁付にしたがつて、その下に表・裏（オ・ウ）の区別を記し、各丁（裏）毎に改行した。

- (6) 挿絵のある場所には、挿絵第○図として順番号と丁付をつけたが、挿絵そのものは、組版の関係上、その丁付の前後に入れた。

一、解説は、最終巻の後に記した。

護 国

諸家高名記

一

護國

諸家高名記

印系繪入

金部十五冊

# 序

仁<sup>じん</sup>を尊<sup>たうと</sup>ミめくミを感じ 君が代の万歳<sup>ぜい</sup>にあふ賤<sup>しづ</sup>の男<sup>お</sup>賤<sup>しづ</sup>の女<sup>め</sup> 居<sup>き</sup>を安<sup>やす</sup>  
 んじ寒<sup>かん</sup>に愁<sup>うれ</sup>へず食<sup>しょく</sup>乏<sup>とほ</sup>し (序一オ) からず 戸さゝぬ今を悦<sup>あま</sup>ぶの余<sup>あま</sup>りに  
 むかしをかたる綺語<sup>きご</sup>ならめかも (序二ウ)

序  
 仁<sup>じん</sup>にばさきも ちくちくは感<sup>かん</sup>。  
 君が代の万歳<sup>ぜい</sup>より  
 賤<sup>しづ</sup>の男<sup>お</sup> 賤<sup>しづ</sup>の女<sup>め</sup> 居<sup>き</sup>を安<sup>やす</sup>  
 ト 常<sup>じょう</sup>に愁<sup>うれ</sup>くも食<sup>しょく</sup>を乏<sup>とほ</sup>し

うは戸はぬ今に感<sup>かん</sup>。  
 君が代の万歳<sup>ぜい</sup>より  
 賤<sup>しづ</sup>の男<sup>お</sup> 賤<sup>しづ</sup>の女<sup>め</sup> 居<sup>き</sup>を安<sup>やす</sup>  
 ト 常<sup>じょう</sup>に愁<sup>うれ</sup>くも食<sup>しょく</sup>を乏<sup>とほ</sup>し

# 諸家高名記卷之一

## 目録

① 石田佐五右衛門秀吉公をひてよし羨事うらやむ

懷胎くわいたいの女子なんしを男子へんすにましな変る術じゆの事  
附タリ

江州光明寺こうしうくわうめうじの觀世音利生りしやうの事

② 細川忠興おき朝鮮陣軍忠の事

加茂大宮司かものだいぐじ松下丹後まつのしたたんごへ下向げこうの事  
附タリ

小野木縫殿助田辺をのぎぬいのすけたなべの城責しろぜめの事（二才）

③ 百々ど、越前守早打はやうちにて京へ登のほる事

附タリ

入江左近倭奸いりゑ ねいかんのもつて忠臣をさゝゆる事  
飯沼いぬま十郎兵衛討手うってをのぞむ事

④ 小西摂津守 憤いきどをりをつよく罵のゝしる事

附タリ

前右衛門督義郷勇氣さき かみよしさとゆうきの事  
石田治部少輔ちぶのせうが家来鼻けらいはなをそがるゝ事（一ウ）

① 石田佐五右衛門 秀吉公を羨事うらやむ

己をのれに克かつて礼に復かへれとのをしゑ。誠に人ハ心の私によつて。邪よこしまなる道をおこなふ。慎つしむを忘わするゝ事あり。かならず身分の。程を守るべき事也。既に昔すで豊臣太閤秀吉公の五奉行のうち。石田治部少輔三成なりときこえしハ。あふみの国の城主にて。高祿世かうろくにならびなく。さしも天下の御覚へすぐれければ。諸士肥馬ひばの塵ちりをはらひ。礼義を厚あつくもてなしけるされバ此三成。各別の英才あいさいにて。それを人のうやまふにあらず。秀吉公の御憐愍れんみんふかき治部少輔たるゆへ。ミな上をおもんじてのつゝしみなり。扱あも秀吉公にハ。異国迄武威いこくよこゑをほどこし給ひ。げにや鬼神をも。あざむく程の勇将ゆうしやうなれども。人ののがれかたき（二オ）はかね

て行<sup>をこのう</sup>。道のいつはりなく。慶長三年八月十八日に。伏見の城におゐて。  
顔<sup>たれい</sup>齡六十三才にてをへらせ給ひ。遺言<sup>ゆいげん</sup>によつて。甲冑<sup>かうちうきうせん</sup>弓箭<sup>ひつき</sup>を。棺<sup>ひつぎ</sup>の  
中におさめ。木食<sup>きやうさん</sup>興山上人<sup>けいまい</sup>經營して洛東あミだがミねに葬<sup>ほうふ</sup>り。墓<sup>はか</sup>を  
その巔<sup>いただき</sup>に築<sup>きづ</sup>き祠<sup>ほくら</sup>をそのふもとにかまへ。勅<sup>ちよくいつ</sup>諡あつて。是を豊国大  
明神といへり。されば又爰に江州石田村に佐五右衛門といふ者あり。  
代々所に居住<sup>きやうちう</sup>して衣食のふたつをも乏<sup>とほ</sup>しからず。しかるに妻女<sup>さいじよくわい</sup>懷妊<sup>にん</sup>  
して産月をまつ折から。佐五右衛門世上の事をつらく思ふに太閤秀  
吉公の成たちを聞ば。誠や尾張国。愛智<sup>あいち</sup>郡<sup>こほりちく</sup>筑阿弥が子にて。同国光  
明寺につかハれ。弟子と成べき身の。学文をせず。朝夕のふるまひ我  
まゝなるによつて。八才の時此寺を追出され。それより。(二ウ)  
親の家にて農業<sup>のうぎやう</sup>をつとめ。十六才にて遠州の松下嘉兵衛につかハれ。

四五年奉公の内に。少身なる主人にて。すゑく我身の出世。おぼつかなき事を分別して。廿のとし織田信長へ奉公に出。次第立身して。智謀群にすぐれ。武略世にこへて。一とせ信長の下知をかうふり。山陰道に発向して。逆徒をせめほろぼし。其恩賞に。播広備前備中。但馬因幡五ヶ国を安堵し給ふ。ひとへに筑阿弥が子の。木下藤吉殿なれども。心の丈夫によつて。かゝる出世立身して。世の草木をもなびけ給ふ。今我妻女懐胎したるが。あはれかしねがハしや。男子にて。家をも名をも引趣し。子孫の繁昌をミせよかしと。明くれ思ふいろめを妻女も心ゑて何とぞ男子にて。あれかしとねがふに。帯の業する古姥のいへる（三オ）をきけば。懐胎の子の。右のかたへよりたるハ。大方女子にて候へば。男子にてハ有まじといふ。妻女是を心う